

八戸学院大学学報

八戸学院大学短期大学部学報

建学の精神

「神を敬し、人を愛する」

八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部は、カトリック精神に則る道德教育を施し、高潔なる人格の完成を期し、現代社会が要請する有為の人材を育成することを建学の精神とする。

広がる学びと深まる地域連携

むつ下北キャンパス開設セレモニーを開催しました

4月26日（土）、下北地域の看護師育成に向け、今年度むつ市に開設された八戸学院大学むつ下北キャンパスにて開設セレモニーが開催されました。当日は関係者ら約50名が出席し、キャンパスの開校と、新たに学びをスタートさせた第1期生11名の門出を祝いました。

式典では、小林眞学長が「卒業後、この地域の医療体制の充実のために活躍する日を迎えられることを心から祈っています」と挨拶。続いて、山本知也むつ市長より「卒業後は地域の医療を守る立場になる。患者さんに寄り添う気持ちをこの4年間で養ってほしい」と祝辞が送られました。

第1期生を代表して越膳ルル花さんは、「4年間、主体的に学問に励み、誠実で信頼され、むつ下北地域に貢献できる看護師になります」と力強い誓いの言葉を述べました。

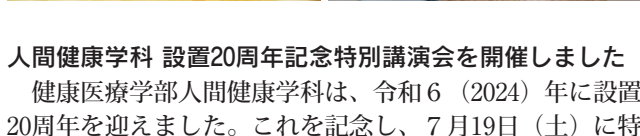
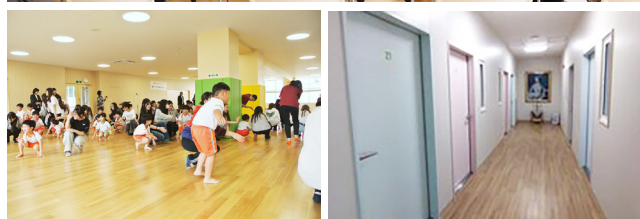
テープカット終了後は施設見学が行われ、出席者は大学担当者の案内のもと、講義室や実習室などを見学しました。



新ホール完成セレモニー

6月11日（水）、10号館（幼児保育学科棟）2階の多目的ホールにて「新ホール完成セレモニー」を開催しました。当日は、日頃よりご支援をいただいている後援会・同窓会・父母の会の皆様にご臨席いただきました。式典では、短大学長、理事（大学学長）、後援会長の挨拶に続き、祝賀演奏として学生によるピアノ演奏や、園児と学生による歌が披露されました。続いて、普段このホールで実施している学生と園児によるリトミック教室の様子も公開され、ご出席の皆様にその様子をご覧いただきました。

式典終了後は、校舎改修に伴いリニューアルされた「ピアノレッスン室」「美術室」「1005教室」の施設見学を行いました。



人間健康学科 設置20周年記念特別講演会を開催しました

健康医療学部人間健康学科は、令和6（2024）年に設置20周年を迎えました。これを記念し、7月19日（土）に特

別講演会を開催いたしました。

当日は、プロ野球・オリックス・バファローズや米大リーグなどで20年以上にわたりトレーナー・コーチとして活躍されてきた中垣征一郎氏を講師にお迎えし、「スポーツを通した学びとキャリア形成—大学でスポーツを学ぶ意味—」をテーマにご講演いただきました。

中垣氏のご自身のキャリアを振り返りながら、トップアスリートを支える現場では、大学で学んだスポーツ科学の基礎知識や幅広い教養が非常に役立っていると強調されました。また、“Think outside the box”（固定観念にとらわれない）というフレーズを交え、常識に縛られない柔軟な発想の大切さを語られました。

参加した高校生や大学生は熱心に耳を傾け、講演後の質疑応答では多くの質問が寄せられるなど、大変実りある講演会となりました。



KAIGOきらめき隊☆けっぱレンジャーが市長賞を受賞しました

2月14日（土）、八戸市の学生まちづくり助成金・高等学校地域活動促進事業助成金を活用し、学生や高校生のみなさんが実施した地域振興や地域貢献に関する事業・活動の成果を発表する、「学生&高校生まちづくりコンペティション」において、『認知症応援ミッション開始！一緒に笑って、動いて、認知症を理解しよう！』（KAIGOきらめき隊☆けっぱレンジャー）が見事、市長賞を受賞しました。



けっぱレンジャーは、地域包括支援センター・中学校・商業施設などと連携し、認知症寸劇や予防体操、啓発クイズなどを通して、楽しくわかりやすく認知症を伝える活動を行ってきました。今回の受賞は「新しい認知症観」の普及や「介護の魅力」の発信に取り組んできたことが高く評価されたものと受けとめております。



これからも介護福祉学科、そしてけっぱレンジャーは、地域とともに、誰もが自分らしく暮らせるまちづくりに挑戦していきたいと思っております。

令和7年度 地域経営学部地域経営学科の活動紹介

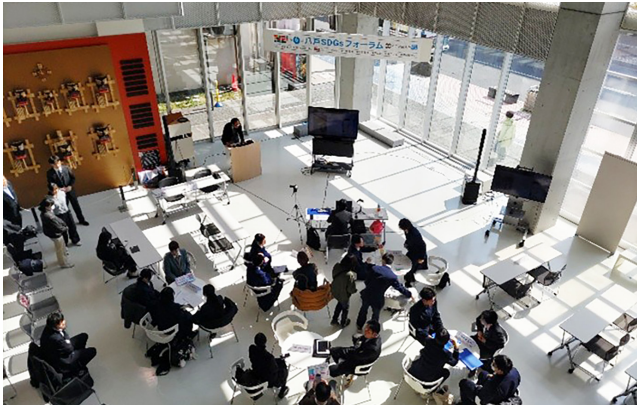
① 第6回八戸SDGsフォーラム開催

地域共創（経営）学科では、令和8年3月22日（日）に、八戸ポータルミュージアム「はっち」で第6回「八戸SDGsフォーラム」を開催した。今回のフォーラムは、高等学校8校、10グループの参加に上った。各高校の発表テーマは多岐にわたっている。高校別（発表順）では、八戸西高等学校「地域の力をアップデート！南部菱刺しの魅力を広めるSNS発信と『つくる責任』」、八戸北高等学校「過去の技術の応用～解体しやすく長持ちする建築～」、八戸

水産高等学校「キレイ 鮫・海 大作戦4 ～森から海へのラブレター～」、八戸学院光星高等学校「ベトナムの医療安全確保のために日本ができることは？」、八戸東高等学校「まちめぐりスタンプラリーで八戸を活性化」と「食用菊入りあんこを使ったお菓子で八戸をアピール」、八戸工業大学第二高等学校「ウミネコ生態研究」と「児童デイサービスの役割と課題」、八戸高等学校「地域活性化のための農業体験の推進について」、八戸聖ウルスラ学院高等学校「SDGs達成度ランキング1位のフィンランドから学

ぶ、八戸・青森のSDGs」であった。そして、前回と同様、八戸学院大学の教員が高校生の発表に講評を行う形態を取り、地域社会の持続的な発展について高校生と本学学生が共に考えるワークショップも実施した。次年度はさらにアップデートしたフォーラムを開催していく所存である。

(文責) 植原 啓正



② 資格取得等の活動

地域経営学科では、専門教育科目において情報システム、プログラミング、簿記・会計に関する科目を配置し、地域経営に携わるために必要な情報・会計関連の資格や、商業・情報の教員免許状の取得に向けた指導に努めている。

簿記関連資格については、「企業の経営活動を記録・計算・整理して、経営成績と財政状態を明らかにする技能」を身につけることを目的とする日商簿記検定試験の取得を目指しており、令和7年度は日商簿記検定試験3級に2名、2級に1名が合格した。

情報関連資格については、情報処理の促進に関する法律第29条第1項の規定に基づき経済産業大臣が実施する情報処理技術者試験の一区分である国家試験のITパスポート試験に1名が合格した。

FP資格取得状況については、FP3級の資格に2名が取得しています。

教員免許状については、高等学校教諭一種免許状（商業）1名、高等学校教諭一種免許状（情報）3名が取得している。

なお、2025年度には国家資格である宅地建物取引士に1名が合格している。

(文責) 高須 則行

③ 横田ゼミナールによる「八戸市物流企業見学ツアー」への参加

国際関係論を専攻する横田ゼミナールの学生たち(13名)は7月3日に、グローバル物流の現状ならびに八戸が物流に関して有するポテンシャルの理解を目的としたフィールドワークの一環として、八戸市主催の「八戸市物流企業見学ツアー」に参加した。当日は、JR貨物の八戸貨物駅、共同物流サービスの第2物流センター、および八戸通運の北インター物流倉庫を視察するとともに、青森県トラック協会三八支部より八戸のトラック輸送を取り巻く現状について説明を受けた。八戸港湾運送の担当者の案内のもとで、八戸港コンテナターミナルの見学も行った。この「見学ツアー」は、八戸市商工労働まちづくり部商工課と担当教員とが相談を重ねて実施行程等を決めたもので、本学学生の地元企業への就職と地域への定着も念頭に置いた取組で

あった。横田ゼミナールでは、次年度以降も自治体や地元企業などとの連携および協働を積極的に実施し、地域社会の持続可能な発展に資することのできる国際的視野も備えた人材の育成に努めていく。

(文責) 横田 将志



④ 川守田ゼミナール（アントレプレナーシップ専攻）の取り組み

川守田ゼミナールでは、学生自身が社会課題を発見し、新たな価値を創造することを重視している。学生は複数のプロジェクトに分かれ、チャレンジ精神を持って主体的に行動し、協働しながら実践と検証を通じて社会に還元する学びを体験している。特に、フランス人ボランティアと協働することで、国境を越えた協力や多様な価値創造にも挑戦している。

(1) はちがくフラワーロスプロジェクト(4年生3名・2年生7名)地域で発生するフラワーロスを課題とし、令和6・7年度の「学生まちづくり補助金」を活用して挑戦。テーマは「花とウェルビーイングでつなぐ地域の未来」である。学生は自らビジネスモデルを構想し、フラワーソーシャルビジネスの検証・実践に取り組んだ。

- ☐ 幼稚園児への啓発活動
- ☐ フラワーカフェやハーバリウム体験の運営
- ☐ 地域住民へのヒアリング

など、多彩なアクションを展開し、地域の草花や花大、戸田菓子舗、稲村歯科医院、名久井農業高校の協力を得ながら、チームで協力して課題解決に挑んだ。

この過程で、起業家精神、創造力、実践力、チームでの協働力を育成し、令和7年度学生&高校生まちづくりコンペティションでSDGs賞を受賞。未利用資源に新たな価値を見出し、地域に還元する経験を通じて、アントレプレナーシップの要素を実践的に学んだ。

(2) V2F(価値検証フィールドワーク)ハチガク町おこしたい(2年生4名)

学生主体で、仮説立案・現地調査・分析・検証の一連のプロセスに挑戦。令和7年度は十和田市の廃校活用による地域交流拠点の創出をテーマとした。

- ☐ 現地調査による現状把握
- ☐ 課題分析と解決策の提示
- ☐ 神戸大学イノベーション教育学会でのパネル登壇・ポスター発表を実施し、チームで協力して価値創造とその検証に挑む経験を積んだ。学生は情熱を持って行動し、実践力と課題解決能力をさらに高めた。次年度も活動を継続し、卒業論文として成果をまとめる予定である。

(文責) 川守田 景子



⑤ 楊ゼミナールの活動：「衣・食・遊」でつながる未来 —若年層主体の異文化交流と住みやすいまちづくり—

若年層における国際交流への関与の低さという課題を踏まえ、本ゼミは八戸学院大学、短期大学部の留学生（卒業生を含む）と連携し、市内高等学校において異文化交流活動を実施した。生徒が直接異文化に触れる機会を提供することで、異文化理解力の向上と他者への共感力（エンパシー）の育成を図り、地域における共生社会の基盤形成を目指した。本ゼミは2025年度、八戸市の学生まちづくり助成金を活用し、「衣・食・遊」をテーマとした異文化交流事業を実施した。本事業は市内高校生を対象に、留学生とともに体験型ワークショップを全3回開催したものである。第1回は八戸東高等学校でインドネシアの遊び体験、第2回は八戸北高等学校で韓国のキンパ作り体験、第3回は八戸高等学校で中国の漢服試着体験を行い、3校で計約60名が参加した。各回ではスライド説明やクイズに加え体験活動を取り入れ、参加者は楽しみながら異文化理解を深めた。事後アンケートでは肯定的な意見が多く、多くの生徒にとって初めての国際交流の機会となったことが確認された。さらに、ほぼ全員が今後も参加を希望しており、本事業は若年層の国際交流への関心向上に寄与する有意義な取り組みとなった。

（文責）楊 麗栄



令和7年度 健康医療学部人間健康学科の活動紹介

人間健康学科では、引き続き障害を持つ学生や健康不安、学業などの課題を持つ学生の状況について学科内で共有するとともに、特別学生支援委員の教員が中心となりカレッジアドバイザーやスクールカウンセラーと連携を図り、相談・教育・支援を行った。また、小学校二種免許課程開設に向けて調整・申請した結果、次年度からの課程開設が認可された。本学科で実施している八戸学院大学健康マイスターには、14名が申請し全員が認定された。

教員免許は、高等学校教諭一種免許状（保健体育）は28名、中学校教諭一種免許状（保健体育）は20名、養護教諭

一種免許状は13名であわせて高等学校教諭一種（看護）1名が免許状を取得した。JATI 認定トレーニング指導者試験は、3名が合格、JSPO スポーツコーチングリーダーは4名、認定心理士の資格申請は20名がそれぞれ申請した。社会福祉士国家試験は、10名が受験し6名（合格率60%）が合格した。食生活アドバイザー試験3級では9名が合格し、2025年度あおり食育検定では8名が合格した。

地域貢献活動では、南部町社会教育課と連携して、「転倒・寝たきり予防教室における健康調査」を、また今年度より南部町健康こども課からの委託事業として「こどもの健康

応援プロジェクト」を実施した。大学祭における「地域住民を対象とした健康調査」では、身長、体組成、骨密度、血圧、握力の測定と貧血検査を行い、測定後は、参加された地域住民176名に学生による結果の説明を行った。

地域医療セミナーは、医療法人芙蓉会こころのケアセンター「ふよう」鈴木克治（スズキカツジ）医師を講師に招いて、「精神医療の現状と課題」をテーマに開催した。また、健康医療学部公開講座は、看護学科と共催し「地域で育むヘルスリテラシー—子どもから高齢者まで—」をテーマにポータルミュージアムはっちで開催した。

以下、本学科の主なコースプログラムについて活動を紹介する。
（学科長 吉田守実）

①スポーツ科学分野

人間健康学科スポーツ科学分野では、中学校・高等学校の保健体育教諭免許、日本トレーニング指導者協会公認トレーニング指導者（JATI-ATI）、日本スポーツ協会（JSPO）公認スポーツコーチングリーダーの資格の取得が可能となっている。また令和8年度より小学校教諭（2種）の養成を開始する。JATI-ATIはスポーツ選手や一般人を対象としたトレーニング指導の専門家として活動するための基礎資格、JSPO公認スポーツコーチングリーダーは地域スポーツクラブ・スポーツ少年団・学校運動部活動等において、安全・安心で基礎的なスポーツ指導や運営にあたる方のための資格であり、どちらの資格も在学中に試験に合格することで取得が可能である。昨年度の活動としては、南部町の社会教育課と連携して高齢者の転倒寝たきり予防教室に介入し、学生が主体となり年6回の測定およびフィードバックが行われた。また、青森県立八戸西高等学校との



高齢者の転倒寝たきり予防教室

高大連携協定の締結により、高校1年生には「成長期のスポーツ活動が骨密度に及ぼす影響」について、高校2年生には高校生と大学生が一緒になったアクティブラーニング形式の授業が、大学生が主体となり実施された。

（スポーツ科学分野担当 渡邊陵由）

②養護教諭養成課程

現在、文部科学省では、子どもの抱える健康問題・課題の多様化や複雑化が進む中で、養護教諭に求められる役割と必要な能力がどのようなものか、そのために必要な教職課程の在り方などが検討されている。主な方向性と強化ポイントは次のように整理される。

1. 強み専門性の確立：医学、看護学に加え、教育学、心理学、養護学を統合的に学び、子どもの心身の健康を包括的に支援する力を養う。
2. 現代的な課題への対応力：心のケア、アレルギー対応、慢性疾患、性教育、特別支援教育、ICT活用など、複雑化する保健室の役割に対応する能力、個別の指導・支援に対応できるアセスメント力を養う。
3. 多職種連携・チーム学校の推進：担任やスクールカウンセラー、外部医療機関などと連携し、組織的に子どもを支援する「チーム学校」の中核となる能力を養う。
4. 実習の充実：現場での実践力を高めるため、養護実習の質の向上や看護学と養護の連携カリキュラムマップの作成と検証

上記1～4については、これまでも、学部で構成される多様な授業および学外での実習などを通して、課題はあるものの、一定の成果を上げている。例として、多くの学生が養護教諭一種免許状に加えて、認定心理士の資格も取得していること、養護実習は養護教諭としての課題の明確化とともにモチベーション向上の機会となっていること、加えて、教科外の活動として、八戸市子ども支援センターの学生支援員派遣事業、青森県立八戸もう響学校学生指導員などの活動を継続的に実施し、教員としての資質向上に積極的に取り組んでいる学生が多いこと、これらの結果、さらなる学習のため大学院に進学する学生や教員採用試験の現役合格者が出ていることなどがあげられる。今後とも、より一層の努力をしていく所存である。

（養護教諭養成課程担当 浜中のり子）

③心理学分野

人間健康学科では、心理学の専門教育科目として17科目を開講しており、これらの科目を一定数履修することで、「認定心理士」の資格を取得することが出来る。「認定心理士」とは公益社団法人日本心理学会が認定している民間資格であり、心理学の専門家として仕事をするために必要な、最小限の標準的な基礎学力と技能を修得していることを保証する資格である。本年の卒業生では20名の学生が認定心理士を取得した。

この認定心理士を取得するための必修科目として、3年次に「心理学基礎実験」と「心理学実習」という2つの学内実習科目を開設している。「心理学基礎実験」では、心理学の研究手法である実験の技法を習得することを目的として、心理学の研究テーマである感覚・知覚、思考、記憶、行動学習、感性に関わる8種類の基礎的な実験を行った。一方、「心理学実習」では、心理学の実験以外の研究技法である「質問紙調査」、「面接調査」、「行動観察調査」、「生

理指標測定」の実習に加え、臨床現場で用いられている「3種類の心理検査（質問紙法、作業検査法、投影法）」および「知能検査」の診断技法を身につける実習を実施した。（心理学分野担当 金地美知彦）

④社会福祉士プログラム

社会福祉士プログラムにおいては、「地域生活支援センター・カシオペア」との連携による事例検討を毎年実施しており、今年度で6回目となる。今年度は、令和7年11月12日に支援者の方々を本学にお招きし、実際に支援している障害のある利用者について事例検討を実施した。社会福祉士をめざす学生たちは、事例の当事者に必要な支援を考えるために、心身・経済、就労などの状況や、家族や友人との関係などについて質問を重ねた。情報収集したことをもとにグループワークをおこない、解決のためにどのような支援が必要か討議し、意見をまとめて発表した。その後、支援者と学生の話し合いの場も設けられ、学生が支援者から対人支援の現場について学ぶ機会も得られた。

対人支援者との有機的なつながりを通じた学びの過程は、社会福祉士になりゆく学生が実践現場で求められる力を身につけるために、不可欠な体験であると考えている。（社会福祉士実習担当 大木えりか）



「地域生活支援センター・カシオペア」との連携によるソーシャルワーク演習

令和7年度 健康医療学部看護学科の活動紹介

看護学科は看護師または保健師（選択制）を養成する学科であり、日々進歩する看護の知識や技術に対応できる能力や豊かな感性と人間性を備え、地域の保健医療活動、健康増進に看護の実践者として貢献できる資質の高い人材を育成することを教育目的としている。学生指導はゼミ担当・カレッジアドバイザー制の少人数体制で指導を行い、支援が必要と思われる学生については、学科会議等で教員間の情報共有を行い対応している。また、国家試験対策を行い、個々の学生に応じた指導を行っている。今年度からむつ下北キャンパスが開校し11名の新生を迎え、開設1年目が過ぎた。看護学科の主な活動について、それぞれの担当責任者から報告する。（看護学科長 田中克枝）

●第9回宣誓式および特別記念講演について

令和7年5月10日（土）本学5号館において、看護学科の第9回宣誓式が開催された。来賓、保護者、在校生と教職員に見守られ、2年43名は厳かに一人ひとりナイチンゲールの看護の灯火を受け継ぎ、看護の道を進む決意を新たにするとともに、自らが目指す看護師像を宣誓した。本学では、「宣誓式」を専門的な学習が本格的に始まる2年生を対象に、近代看護の創始者であるナイチンゲール生誕の5月12日に合わせ開催している。宣誓者の2年生は、「看護職としての責任と自覚をもち自らを律すること」「尊厳を守り意向や価値観に寄り添った看護を行なうこと」「個性のある看護を実践できるよう学び続けること」「社会のニーズに対応し地域に貢献すること」を宣誓した。

宣誓式後の特別記念講演は、脳卒中と向き合う活動団体One Feels 代表の佐々木三之先生の自身の体験をもとにした、患者からの視点で生の声を聞くことができた。患者の生の声を聞くのは初めてであり、どのような看護師になればいいのかを考えさせられた講演であった。患者の気持ちを察することや理解し寄り添うことのできる看護師になるために、実習などの経験を積み重ね、常に学習していかなければならないことを宣誓式とともに決意し、また長い人生のなかで困難にぶつかっても、あきらめないことの大切

さも心に染みて感じた講演であった。

宣誓した2年生から、「宣誓式で決意した言葉や灯火を忘れずに看護の道を歩んで行きたい」「ナイチンゲールのように一人一人に寄り添ってあげられるような看護師になりたい」等の感想があり、看護の道を進む決意を新たにしたい機会となった。

（令和7年度宣誓式実行委員長 築場理利子）

●看護学科就職内定状況と就職支援活動報告

令和7年度八戸学院大学健康医療学部看護学科では62名の学生が卒業を迎えた。県内就職者38名（61.3%）、県外就職者23名（37.1%）で就職内定率は98.4%であった。このうち保健師課程修了者は10名であったが、保健師採用はなかった。県外の就職先は、出身県の岩手県のほか宮城県、関東圏であった。

就職支援活動は、3年次進級してすぐの4月からキャリア支援講座を実施している。内容は「スタートアップ講座」「病院選定」「卒業生講話」「マナー講座」「マスター講座」の5講を1年間のなかで実施している。その他、学年問わず4月に3回、論文講座も実施している。また、大学主催の就職説明会や教員との就職面談・相談、エントリーシート作成、面接練習も行ない、希望する就職先に内定できるよう支援している。また、早めに内定を得ることにより、余裕をもって看護師国家試験に臨めるよう指導を行っている。（看護学科就職支援委員会 築場理利子）

●看護学科国家試験対策について

国家試験対策においては、学生が自律的に学習を進めることを目標としている。3年次には学習計画を作成し、看護師国家試験過去問題集を活用した学習を通して、学習への動機付けと継続的な学習の積み重ねを促し、国家試験受験に向けた自覚を高める。4年次には学生が自主的に計画を立て、継続的に学習を進めることで理解を深め、自信をもって試験に臨める状態を目指す。具体的には、模試（学内・全国）の成績およびGPAに基づき早期支援が必要な

学生を抽出し、学習進捗や学習方法に応じた個別計画を策定し支援を行うほか、確認テスト、全国模試、領域別補講、外部講師による対面講義等、多様な学習支援を実施している。一方で、近年の国家試験では看護判断・実践能力を問う出題が増加しており、全員合格は容易ではない状況である。このため、1年次からの継続的な学習の積み重ねの重要性が強く認識される。

第115回看護師国家試験受験者 61名 合格率(95.1%)

第112回保健師国家試験受験者 10名 合格率(90.0%)

(看護学科国家試験対策委員長 三浦広美)

●保健師養成課程について

保健師の活動は社会情勢や人々の考え方・行動と深く関わっています。その領域は、生活習慣病対策やメンタルヘルス、児童虐待防止、高齢者や障がい者の孤立解消、さらには感染症対策や自然災害への対応など多岐にわたります。そのため、保健師の活動の対象は、乳幼児から高齢者と幅広く、健康な人から病気や障がいを抱える人まで、あらゆる人々と地域全体の健康、生活の質の向上のために、それぞれの地域の実情に応じた柔軟な活動を展開しています。

保健師養成課程では、看護師としての知識を基盤とした専門知識の獲得と、健康教育・保健指導等の学内演習、大学周辺の地区踏査・乳幼児健診の見学等の学外演習、保健所・市町村保健センター・地域包括支援センター・一般企業等の施設実習を通して、実践的な支援技術を学び、対象者1人1人に寄り添いながら、地域や組織全体の健康課題を解決できる実践力を養います。

(保健師課程教員 古舘美喜子)

●むつ下北キャンパス 開設一年目の歩みと展望について

看護学科では、2025(令和7)年4月、「むつ下北キャンパス」を開設し、11名の学生を迎えた。学生の内訳は、本キャンパス独自の「むつ下北キャンパス就学資金貸与制度」の利用者が10名、「むつ総合病院修学資金貸与制度」の利用者が1名であり、卒業後は全員がむつ総合病院へ就職する予定である。

日々の学習は、週のうち火・木・金曜日はむつ下北キャンパスでのオンライン講義、月・水曜日はバスで美保野キャンパスへ移動しての対面講義という、二つの拠点を活用した形態をとっている。また8月には、初めての臨地実習となる「基礎看護学実習Ⅰ」をむつ総合病院で実施し、現場

での貴重な経験を積むことができた。

この一年間、学生が満足できる学習環境を追求すべく、事務局と連携しながら受講環境の整備を進めてきた。オンライン講義においては、学生の集中力を高めるため、個々のパソコンに加え、教室前方へ大画面モニターを設置し、美保野キャンパスでの講義の様子をリアルタイムで投影することで、遠隔地であることを感じさせない一体感の創出に努めた。また、教員側からも、むつ下北キャンパスの学生へ積極的に質問を投げかけたり、接続状況をこまめに確認したりといった配慮を重ねている。こうした工夫により、双方向のコミュニケーションが可能となり、対面講義と遜色のない受講環境を実現できたと考える。

次年度には二期生が入学する。これまでの成果を糧に、学生たちがより充実したキャンパスライフを送り、志を高く保ち続けられるよう、さらなる受講環境の整備と教育活動の充実に向けていく所存である。

(むつ下北キャンパス長 木村 緑)



看護学科学祭



技術演習

令和7年度 健康医療学部別科助産専攻の活動紹介

令和7年度で開設3年目を迎えた本別科は、入学生の9割が青森県内に助産師として就職し、「青森県の母子保健に貢献する助産師の育成」を目指した開設時の願いは順調に叶っている。地元で活躍されている非常勤講師・グェスティーチャーや臨地実習先の皆様には心より感謝申し上げる。今年度はこれまでのカリキュラムを見直し、いくつかの改善点と課題を見出した。次年度はこれらを活かし検討を重ねながら、より良い助産師教育ができるよう努力する所存である。また、修了生で組織する「CREA(クレア)の会」第一回目を昨年の6月に開催した。参加者は在学生(三期生)と一期生であったが、情報交換や励ましの会と

して楽しく有意義な時間を過ごすことができた。

助産学生が「健康教育技法」を学びながら地域貢献をする取り組みの二つを以下に紹介する。

(文責 別科長 高橋雪子)

「高校生女子アスリート対象の健康教室」

助産学生が講師となり、高校生女子アスリートに向けて健康教室を3か所の高校で開催した。今年度のテーマは、「スポーツをしながら月経とうまく付き合うために」であった。具体的には、「月経のメカニズム」「自分の月経について知ろう」「月経とコンディショニング」「月経痛と対処方

法」「月経用品」の内容であった。学生は、高校生にわかりやすく伝えるために試行錯誤しながら練習を重ね本番に臨んだ。「自分の月経について知ろう」では、月経に関するチェックシートで自分の月経状態をチェック後、それぞれの項目の意味を学んだことは異常や正常を判断する上で参考になった。また、「月経用品」では、実物の配布や動画を用いて使用方法を説明したことで、「月経用品の種類」の多さに驚いた」などの反応があった。高校生の感想文からは、「単に月経についての知識が増えただけでなく、自分の身体をコントロールし上手に付き合っていくとする前向きな姿勢」が強く感じられ、助産学生にとって達成感のある健康教室であった。（文責 藤邊祐子）

「未就学児向け性の健康教室」

法人系列3つの幼稚園と八戸市美術館まちなかラボにおいて、「未就学児向け性の健康教室」を4回開催した。今年度は『プライベートパーツってなあに？』をテーマに、「男女のからだの違い」「プライベートパーツ」「自分のからだを心を守るための行動」について、寸劇などを交えて園児がより楽しく学べるよう内容を構成した。園児を対象とした性に関する内容であることから、言葉の選び方、伝え方、内容の順序性を何度も吟味しながらシナリオを作成し、実践の場では、園児の素直な反応から、実施した健康教室の内容を振り返り改良を重ねた。健康教室後に行われる保護者との懇談会では、「性教育の重要性は理解しているものの、子どもとの距離が近い故に家庭での性教育が困難である」という悩みが聞かれ、他の幼稚園・保育園、小

学校でも開催して欲しいという要望が多く聞かれるようになった。この活動が青森県内でより拡大し、多くの子どもの健やかな成長の一助になることを願っている。

（文責 前森桃子）



令和7年度 幼児保育学科の活動紹介

今春、「幼児保育学科」という学科名での最後の令和7年度卒業生52名を社会に送り出した（令和8年4月より『こども教育学科』に名称変更）。本学科は、名称が示すとおり、保育士・保育教諭・幼稚園教諭を養成するもので、保育者・教育者としての専門知識・技術の修得を目指していることは言うまでもないが、学科のポリシーとして掲げている「豊かな表現力」、「他者と協働する力」、「社会に貢献しようとする意欲」をも養うために、学内外でさまざまなプログラムを展開している。

今回は、その主な活動について紹介、報告する。

【模擬保育】（6月、10月）

模擬保育とは、学生が保育者役と子ども役に分かれ、自ら作成した指導計画（指導案）に沿って実践を行う演習である。実習でこれまでの学びの成果を発揮できるように、保育現場に近い状況を体験することで、実践力の向上や自己課題の把握、実習に向けた自信の積み上げを目指している。

本年度、1年生は、10月の「保育内容総論」（担当：鈴木講師）の講義で、絵本・紙あそび、造形あそび、ダンス・ミニゲームの3つのテーマで、指導計画を作成した。事前準備では自ら見本を作成して教材研究に励み、当日も授業開始前から集まってリハーサルに取り組むなど、意欲的な姿が見られた。

2年生は、6月の「教育課程論」（担当：差波教授、野口教授）の講義で作成した指導計画をもとに、4歳児を対

象とする模擬保育を実践した。グループ内で互いに協力して準備や振り返りを行い、実習に向けた実践的な内容となった。

学生たちが、保育実習や教育実習に向けて、前向きな挑戦ができるように、今後もサポートし続けていきたい。

（担当代表：鈴木康弘）

【砂浜彫刻】（6月）

6月20日に八戸市の白浜海岸において、幼児保育学科1、2年生約110名が参加し「砂浜彫刻」が行われた。この行事は、実践を通して地域理解を深めるための「地域文化論実践講座Ⅰ・Ⅱ」の一環として行われており、1・2年生



の交流を深める機会にもなっている。今年度は、『子ども喜ぶ〇〇』をテーマに10チームに分かれて活動し、学生たちは八戸の素晴らしい自然の中で砂の彫刻づくりを楽しんでいた。（担当代表：天摩雅和）

【八戸小唄流し踊り】（7月）

7月18日（金）に行われた八戸小唄流し踊りに、幼児保育学科と介護福祉学科の1、2年生138名が参加した。幼児保育学科は6月頃より練習を積み重ねてきた。本番は、色とりどりの浴衣に着替え、お揃いの手ぬぐいとうちわを身に付け踊りを披露した。2年生は2回目の参加ということもあり、堂々とした踊りを披露し、1年生の良い見本となってくれた。1年生は初めての参加だったため、たいへん緊張している姿も見られたが、多くの声援に励まされ、徐々に笑顔で楽しく踊る姿を見ることができた。限られた時間の中で練習を重ね、本番では短大生らしい踊りを披露することができ、学生一人ひとりが達成感に満ち溢れていた。今後は、保育者として八戸の素晴らしい伝統文化を子どもたちに継承してほしいと願う。（担当代表：本吉好）



【保育者の学びのニーズに応じた研修】（8月）

令和7年8月30日（土）に、1日日程で表記研修会を本学とオンラインにてハイブリッド形式で開催した。県内の保育所等従事者と、今後従事予定の方を対象にしたリカレント教育の一環として開催している研修会であり、4講座で延べ111名が参加した。

今年度は、「地域で育てる、地域で育つ」を副主題に掲げ、青森県内の保育・教育を推進している学校法人千葉学園千葉幼稚園の岡本潤子園長、前青森市立沖館小学校長・大賀重樹氏を講師に迎え、また、本学の野口教授、差波教授も講師として研修を展開した。

講師からは、地域の特性や地域の社会資源をどのように幼児期の教育や保育に取り入れていくべきか、またその具体的な取組や実践についての提言があった。参加者からは、「自身の園の強みを実感することができた。」という意見や、「今、行っている小学校との連携の意義を再確認できた。」という意見など、保育者が自分の保育や教育を前向きに捉える機会となった。（担当代表：差波直樹）

【実習報告会】（12月）

保育者を目指す学生は、本学での学びの時間の中で、保育実習Ⅰ（保育所、施設）、保育実習Ⅱ（保育所）またはⅢ（施設）、教育実習（幼稚園等）を行う。どの実習においても現場の空気を肌で感じ、そこで出会う保育者の方々、子どもたちと過ごす時間の中で、学生は貴重な経験

をする。

実習報告会は、そのすべての実習を終えた学生の代表者が、現場で得た気づきや課題等を言語化し、すべての在校生に報告するものである。つまり、個人の経験を「集団の学び」へと高める大切な機会に位置付けられる。実習先により方針、規模や行事等は異なるが、実習の中での成功体験だけではなく、失敗から学び取った「保育者としての専門性」について語り考え合うこの機会は、実習を終えた学生たちにとっての集大成とも言える。

下級生にとっては、先輩の生の声を聞き届けることで、実習への見通しを立て、意欲を高める場でもある。理論と実践が結びつくこの報告会は、学生にとって、理想の保育者像を再確認し、次なるステップへ踏み出すための重要な節目となる。そして、学びを繋ぐ「実習報告会」は、互いに高め合う機会となるものであると考える。

（担当代表：野口和也）

【ゼミナール研究成果報告会】（12月）

令和7年12月17日（12:50～14:20）に、各ゼミナール8分の発表時間で、今年度の活動報告及び研究成果の発表を行った。参加者は、幼児保育学科1・2年生および教職員125名である。（1年生58名、2年生53名、教職員14名、合計125名）ゼミナールの1年間の活動や研究成果の報告が

2年生を中心に行われた。10ゼミから、「食育実践研究」「自閉スペクトラム症の子どもへの支援に関する研究」「私たちの興味関心・好奇心から学び合う」「『子どもの遊び』の実践報告」など、担当教員の専門性と幼児保育学科に学ぶ学生の興味・関心に基づいた多様なテーマへの取り組み成果が、主にプレゼンテーションソフトを使用して報告された。学内だけでなく学外のさまざまな場所で行った各ゼミの内容を共有することで、今後のゼミナール活動や保育者としての学びに対する意欲を高める機会となった。

（担当代表：三上幾子）

【星の子シアター】（2月）

2026年2月14日（土）、SG GROUP ホールはちのへ（八戸市公会堂）において、系列幼稚園園児および幼児保育学科学生による「星の子シアター」を実施した。

第1部では、系列幼稚園年長児との共演による音楽劇『ノア方舟』を上演。本作品は建学の精神に基づき、天地創造から大洪水を経て虹の約束に至る物語を通し、他者への思いやりや命の尊さを表現したものである。創作過程においては、リトミクの授業やリハーサルを通し、学生が園児と継続的に関わりながら、各系列園における保育者の指導法を間近で学ぶ機会となった。これらは本法人ならではの実践的かつ貴重な学びの機会となった。続く第2部では、幼児保育学科2年生の卒業公演となるミニオペレッタ



『オオカミと7匹の子ヤギ』『おーい！大江戸大どろぼう～天下の人助け！ねずみ小僧物語～』を上演。当日は地域の保育関係者等の来場もあり、学生と観客が一体となった躍動感あふれる表現発表の場となった。本公演は、学生にとって保育者としての資質・能力を涵養する実践的学修の集大成として位置付けられるものであり、舞台経験を通して培われた表現力および協働性は、今後の保育実践において大いに資するものと期待される。

(担当代表：中嶋栄子)

その他にも、ゼミナール活動として地域の保育園等を訪

問し、子どもたちと触れ合う機会や自治体や団体主催のイベント活動への参加の機会を持たせていただいた。資格・免許取得のための現場実習をはじめとし、これらのプログラムの多くは保育・教育現場や地域の皆様のご支援とご尽力の上に成り立っている。この場をお借りして感謝申し上げ、卒業生たちが現場で恩返しをしてくれることに期待したい。

なお、令和7年度卒業生52名のうち、保育士資格所得者は51名（取得率98.1%）、幼稚園教諭二種免許状取得者は48名（取得率92.3%）であった。また、就職率は100%（うち県内就職率83.7%）であった。

令和7年度 介護福祉学科の活動紹介

介護福祉学科では、高い専門性を備えた介護福祉職のリーダーを養成することを目的に、多様な教育活動を展開している。

令和7年度の入学生は、留学生5名を含む15名であり、前年度より微増したものの、定員には達していない状況であった。そのため、学生募集活動をこれまで以上に充実・強化し、全教員が連携するとともに、学生の協力も得ながら積極的な広報活動を展開した。

教育面では、多様な背景を持つ学生に対して1年次からカレッジアドバイザーおよび留学生担当教員が、状況に応じたきめ細かな指導・支援を継続して行ってきた。また、本学独自の活動として、昨年度に引き続き、学生主体の活動として「KAIGO きらめき隊☆けっぱレンジャー」による介護の魅力発信や、地域住民を対象とした認知症予防の普及啓発活動に取り組んだ。これらの活動を通して、学生は地域貢献の意義や介護の価値について理解を深めるとともに、専門職としての役割を再認識する貴重な機会となった。

以下に特徴的な取り組みを紹介する。

【介護福祉士国家試験 100%合格】

介護福祉学科では、国家試験全員合格を目標に、1年次から学習内容を段階的に整理し、基礎知識の定着を図るとともに、2年次には計画的な国家試験対策を実施してきた。また、模擬試験の結果をもとに学習状況を分析し、成績の伸び悩む学生には個別指導を行うなど、きめ細やかな学習支援に取り組んだ。

その結果、令和7年度介護福祉士国家試験において受験者全員（11名）が合格し、合格率100%を達成することができた。これは学生一人ひとりの努力に加え、教員による継続的な学習支援と計画的な国家試験対策の成果であると考えている。

【外国人介護人材研修・交流事業】

外国人介護人材として成長するための基礎学習とキャリア形成を目的に八戸市から事業を受託し、研修会（全4日間）や交流会（1日）を実施した。

外国人介護人材は、高齢化の進展に伴い、地域社会を支える重要な役割を担っている。外国人介護職員や留学生においても、専門知識や介護技術を修得し、介護福祉士などの資格取得を通してキャリアを形成していくことが求められている。継続的な学習は、知識・技術の向上に加え、日

本語能力や専門用語の理解を深め、介護現場での実践力の向上につながるものである。

本研修では、「介護の基本」「こととからだのしくみ」「介護過程」などの基礎的学習に加え、国家試験を見据えた試験対策などの内容となっている。対象者は八戸圏域内の外国人介護人材、本学卒業生（外国人）も対象としたため、リカレント教育として、卒業後の学び直しや介護福祉士国家試験対策の機会を提供することができた。参加者のうち、合格者はでなかったが、パート合格に繋げることができた受講者もいたので一定の成果があったものと捉えている。次年度以降も八戸市の支援を受け継続的に取り組みたいと考えている。

また、交流会は、外国人介護人材と地域の介護事業所に参加していただき、相互理解を深める場となった。継続的に八戸で働き、生活するためにはどのようにしたら良いか考える良い機会となった、また情報交換の場となったという声が多かったため、今後も継続的な活動を行ってきたい。

【KAIGOFESTA の開催】

災害に対応できる介護福祉士養成プログラムの開発を目指し、2025年11月15日（土）に「災害エスノグラフィー」を活用した研修会を実施した。災害教育は、自然災害から自分自身や他者の命と生活を守るために必要な知識や行動を学ぶ教育である。具体的には、災害への理解を深めることに加え、日頃からの備えの重要性や地域社会との連携の必要性を理解し、実践的な訓練を通して災害時に適切に行動できる力を身につけることを目的としている。

本研修では、学生が災害を自分事として捉え、要援護者の立場に立って考える力や状況に応じた判断力、支援実践力を養うとともに、多職種や地域住民と連携して支援にあ



たることの重要性を学ぶ機会となった。また、介護福祉士としての使命感や専門職としての責任を再認識し、災害時においても利用者の尊厳を守る実践力の向上が期待される。

【KAIGOレンジャー活動】

岩館ゼミ、小川・杉田ゼミの学生が中心となって結成した「KAIGO きらめき隊☆けっぱレンジャー」は、学生まちづくり助成金を活用した事業のコンペティションにおいて、『認知症応援ミッション開始！一緒に笑って、動いて、認知症を理解しよう！』の活動が高く評価され、市長賞を受賞した。

けっぱレンジャーは、年間を通して地域包括支援センターや小学校、中学校、商業施設など連携し、認知症を身近に感じてもらうための寸劇や認知症予防体操、啓発クイズなどを企画・実施してきた。また近年求められている「新しい認知症観」の普及をはじめ、認知症予防の重要性や介護の魅力・やりがいを発信する場としても、積極的に取り組んできた。学生自らが地域住民と交流しながら学びを実践へとつなげ、さらに地域課題の解決に継続的に取り組んできたことが高く評価されたものと考えている。今後も、地域との連携を深めながら、認知症への理解促進と介護福祉の魅力発信に努め、誰もが安心して暮らせる地域共生社会の実現に貢献していきたい。



【児童生徒の学びの場「福祉・介護の学び講座」の開催】

福祉・介護の仕事への理解を深め、将来の担い手の育成につなげることを目的として、小学生から高校生を対象とした「福祉・介護の学び講座」を継続的に開催している。講座では、認知症や高齢者理解をテーマに、疑似体験やグループワークを取り入れながら、介護を身近なものとして

学ぶ機会を提供している。高齢者との関わり方や思いやりの大切さを伝えるとともに、介護福祉士の専門性や仕事の魅力を紹介し、福祉・介護分野への興味・関心を育む広報活動としても取り組んでいる。

令和7年度は、以下の講座を実施した。

①岩泉小本小学校

令和7年9月5日 「孫世代のための認知症講座」

②八戸市立南浜中学校

令和7年1月31日 「認知症俳諧 SOS 模擬訓練」

③岩泉町立小川中学校

令和7年11月19日 「孫世代のための認知症講座」

④八戸市立三条中学校

令和7年3月3日（月）「高齢者の気持ちを考える」

【エコキャップ回収活動】

鈴木ゼミでは、ペットボトルのキャップを回収し、リサイクルによる収益を発展途上国の子どもたちへのワクチン支援につなげる「エコキャップ運動」を行っている。この活動は、資源の有効活用による環境保全と、世界の子どもたちの命を守る支援を同時に実現できる社会貢献活動である。ゼミ生一人ひとりが身近な取り組みを通して環境問題や国際貢献への理解を深め、社会に貢献する意識を育んでいる。SNSでも活動を頻繁に掲載していたところ、地域の福祉事業所や八戸ライオンズクラブ様からもご協力いただくことができた。今後も継続して活動を行い、多くの方々と協力しながら支援の輪を広げていきたいと考えている。

八戸学院大学 令和7年度 入学式 式辞

新入生の皆さん入学おめでとうございます。そして、これまで皆さんを慈しみお育て頂いたご家族の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

併せまして、熊谷雄一八戸市長様を始め、本日大変お忙しい中ご臨席賜りましたご来賓の皆様方に感謝を申し上げます。

最初に本学の歴史を少し振り返りますと、本学の起源と言える八戸和洋裁女塾が開学したのが1931年（昭和6年）で、八戸市の誕生の2年後の事です。そしてそれが1956年（昭和31年）開学の光星学院高等学校につながり、1971年の短期大学の開学、1981年の大学の開学へとつながってきました。

八戸市は海から生まれ海とともに成長してきた街です。全国でもトップクラスの水揚げを誇る水産業がまちを大きくし、そして1964年（昭和39年）に新産業都市に指定されたことをきっかけに工業都市としても発展してきました。新幹線や高速道路などの交通インフラも順次整い、農業生産も盛んで、国立公園もあり、伝統的なお祭りも盛んで、何でも揃っている、今や北東北の雄と呼べる街になりました。この過程で本学の歴代の先生方がまちづくりの各種委員会で先導的な役割を果たされてきました。（私が見てきました）そしてなによりも卒業生たちが地域のリーダーとして様々な場面で活躍をして来たのは本学の大きな誇りとするところであります。まさに、本学は八戸市の発展と共にあったと言えます。

新入生の皆さんは、今、期待と不安とが入り混じった状態にある方も少なくないと思います。高校生から大学生になり、いずれ社会人になるステップの途上にあります。これからの本学での学びの時間が皆さんの人生の土台を築く時間となります。

明治時代の初期は平均寿命が40歳ちょっとでした。このころであれば皆さんは既に人生を半ばまで生きてきたことになります。ところが現在平均寿命はその倍になり、今後を見通して「人生百年」と言われるようになりました。そのなかで、皆さんには、本学でしっかり学びながら改めて自分を見つめ直し、何をしたいのか、どんな仕事に就きたいのかなど人生設計を考えながら、「大人」と言われる存在に成長し、胸を張って社会の中に出て行ってほしいと願っています。

そのためまず申し上げたいのは、本学のカリキュラムは皆さんがこれから進むであろう社会でいかに役立つかということを念頭に念入りの検討を経て組み立てられているということです。必修科目はもちろんですがすべて役に立つ貴重な知識を与えられるということを理解したうえで授業に向かっていただきたいと思います。高校時代に比べると

学問のレベルが明らかに上がりますが、皆さんが理解できるよう様々な工夫をしながら先生方には授業をしていただいています。

さて、今、世界を見たとき、本当に大きな変化が起きています。第2次世界大戦以後で最も激動の時代ともいえるときを迎えていると言っても過言ではないと思います。国や地域によっては、多くの若者の命が理不尽な形で失われていることも日々のニュースで伝わってきます。皆さんには、平和な中で大学生活を送ることの幸せをかみしめていただきたいと思います。と同時に、この世界の動きが確実に日本にも一定の時間を経て影響を及ぼしてくるのがこれまでの通例です。そういう意味で、皆さんも常に世界の動きには興味を持ち続けてほしいと思います。

そして今、世界の動きで避けて通れないのがDX（デジタルトランスフォーメーション）の急速な進化です。これに学生としてどう向き合っていくかについてお話をしたいと思います。その答えは、敢えて真逆の言い方をしますが、「地頭も鍛えろ」です。今皆さんは、スマホ一個あれば何でも知ることができる超便利な生活の中にいます。しかし、それを漫然と続けるだけの生き方に未来があると思いますか？ NOです。これからの社会で生き抜いていくためには、生成AIを始めこれらを使いこなすことは必須であります。しかし、変化の激しい社会に対応していくためには、DXはあくまでも手段であるということに気づく必要があります。どんなに優れたツールを使いこなせても、根本的な課題を見抜き、解決策を導き出す地頭がなければなりません。その地頭の中身とは、AIでは代替できないものを新たに創り出す創造力、人と人とのコミュニケーションをうまく成り立たせるための共感力、何が正しいかを判断できるための倫理観といった人間の本質的な能力です。ここにまさに大学で先生方と向き合い教えてもらうことの意味があります。今多くは申しませんが、紙でできた本を読むことにも大きな価値があることも強調させていただきます。本学のDXのプロたる先生方からしっかり学ぶとともに、地頭も鍛えることで自分という存在が社会になくならないものになるぞとの強い意気込みで学生生活に臨んでいただきたいと思います。

次に地域とのつながりについてお話をさせていただきます。本学は初めにも申し上げた通り地域に根差した大学として発展してきました。これから新入生の皆さんはいろいろな形で地域に出ていくことがあると思います。様々な資格の取得のための実習、ゼミの学習の一環としての地域研究、実際の会社の現場で学ぶインターンシップ、地域の子供たちのためのスポーツ教室、様々なボランティア活動などです。本学はこれまで近隣自治体や他大学、各企業と連携協定を締結してきました。このような場を提供いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。国が地域における高等教育機関の役割について、行政や経済界や各種団体との連携の重要性を改めて打ち出しています。地域連携の組織化を確

立できた大学を積極的に支援する方向性も示されています。このような流れをしっかり受け止め、さらに地域との連携を強化していきたいと思いますので、新入生のみならずにもご理解をお願いします。

最後に本学の自慢と誇りを申し上げます。それは何と言っても先生方であり、事務スタッフです。先生方は学問一筋で最先端の研究を積み上げてこられた方々もおられれば、実社会の現場で豊富な経験・実績を重ね、活躍してこられた方々など本当に多士済々の布陣という言葉がぴったり当てはまります。そのような先生方が学生の皆さんが社会に出るに際して役に立つような学びということを一番念頭に置きながら日々の授業に当たっていただいています。また、学生からの相談を専門に担当している先生もおられますし、その他勉強のことはもちろん、この先生に何かお話を聞きたいということがあれば、どの先生も気軽に対応していただけます。また、事務スタッフもとても親切に学生たちに対応してくれています。色々書類を窓口に提出する際にも、生活相談も含め分からないことは何でも聞いていただきたいと思います。実は、事務スタッフの中には全国や世界のステージで活躍したアスリートが何人もいます。自分ではそんな顔して働いていないので、口コミで確認していただければと思います。

さて、いろいろ申し上げてまいりましたが、今日からがまさに新入生の皆さんが大人になるための人生の土台作りです。これからの自分の人生を決めるのは今なんだという気持ちで、失敗を恐れず様々なことに挑戦してほしいと思います。この美保野という天から舞い降りて来たような麗しき名前のキャンパスで、皆さんの一人ひとりがそれぞれの努力の結果としての彩り豊かな花々を咲かせることを期待し、私からの新入生歓迎の言葉とします。

令和7年4月4日

八戸学院大学 学長 小林 眞

八戸学院大学短期大学部 令和7年度 入学式 式辞

各地で桜の開花が報じられている中、ここ八戸でも桜の蕾の膨らみがようやく見て取れるようになりました。美保野キャンパスの桜が咲き誇るのはまだ先ですが、鼻先にふと梅の馥郁とした香りも漂う清々しいこの季節に令和7年度入学生の皆さんをお迎えすることが叶い、教職員一同、喜びに堪えません。キャンパスの門を晴れてくぐられた幼児保育学科59名、介護福祉学科15名の皆さんを心より歓迎いたします。ご家族の皆様にも謹んでお祝いを申し上げますとともに、ご臨席賜りました来賓の方々に厚く御礼申し上げます。

本学は1971年に開学し、今年で55年目となります。この節目の年を本学は変化の波とともに迎えております。ひとつには、昨年、開学以来の旧校舎が解体され、幼児保育学科が使用する校舎全体の大規模な改修が行われました。これにより、特に芸術面の教育環境が改善され、日々の授業や練習はもちろん、幼稚園との連携活動にも大いに活用されるものと期待されます。また、幼児保育学科には新しく3年コースが設けられ、2年で学ぶ学生と3年で学ぶ学生が教室を同じくする2コース制に変わりました。20名を超える3年コースの学生の中には、玉川大学の通信教育課程を履修し、小学校教諭二種免許状の取得を目指す人もおり、これも大きな変化となります。

介護福祉学科は令和とともに歴史を重ね、今年で7年目となりますが、開設以来留学生の受入れを進めており、今年はインドネシア、タイ、ネパール、中国の4カ国から学生を迎えました。これまでさまざまな国の学生が学んできましたが、同じ学年にこれだけ多様な国籍の学生が席を並べるのは初めてのことで、まさに国際化の只中にあると言えます。

このような状況にあって、私から皆さんに期待したいのは、本学のアドミッション・ポリシー、すなわち入学者受入れの方針にある共感の力を育てるということです。数年前にベストセラーとなったブレイディみかこさんの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本で大きな話題となったので、ご存じの方も多いと思いますが、英語で共感を表す言葉にはシンパシーとエンパシーの2つがあります。保育者や介護福祉士を志す学生と接すると、人の痛みに自然に寄り添う優しさを感じさせられることが多く、いつも感嘆の思いを抱いておりますが、それはシンパシーの方に当たります。それに対して、他者の立場に立って相手の感情や思考を理解する知的な作業をエンパシーといいます。保育や介護の仕事の根底にはシンパシーがなくてはならないと思いますが、その専門性を磨く上では、感情に流されず、価値観の異なる他者の考えをも想像する力が必要でしょう。本学は小さな短期大学ですが、キャンパスには多様な人々が集っています。気の合う仲間だけでなく、さまざまな人と交流し、意見を交わし、皆さんの資質である共感性を育ててほしいと思います。

皆さんの2年間、3年間での大きな成長を願い、私の式辞といたします。

令和7年4月4日

八戸学院大学短期大学部 学長 杉山 幸子

八戸学院大学 令和7年度 学位記授与式 式辞

本日、学位記授与式を迎えられた卒業生の皆さん、ご卒

業おめでとうございます。皆さんの学生生活を溢れる愛情によって支えてこられたご家族の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。また、ご来賓の皆様には、ご多用のところご臨席を賜り誠にありがとうございます。

今、皆さんの胸には大学生活で経験したことへの忘れたい思いと同時に、これから先自分が歩む未来の道への大きな希望と微かな不安とがない交ぜになった感情が込み上げているものと拝察します。

本学のある八戸市は地方の一都市ではありますが、「北東北の雄」と称せられるあらゆるものが揃った素晴らしいまちです。全国有数の水産都市であり工業都市としても東北の中で群を抜いて発展をしてきましたし、農業生産も盛んです。他に誇れる歴史遺産も豊富であり、伝統的なお祭りもしっかり受け継がれてきました。スポーツや文化芸術活動も大変盛んです。本学院は太平洋戦争後、「神を敬し、人を愛する」というゆるぎない精神を謳う先人により立ち上げられ、八戸のまちの発展とともに歩み続けてまいりました。多くの卒業生が、ここ八戸で、全国各地で、そして世界で活躍しています。美保野キャンパスを巣立つにあたって、皆さんには八戸というまちをふるさととして心に刻んでいって欲しいと願います。

私は、昨年の4月に学長に就任し皆さんとは1年間のお付き合いでした。学長職を務める中で感じたことですが、まずは、各運動部の東北、そして全国での活躍は誇らしい気持ちでいっぱいになりました。そして、普段から学内での授業中や教室間の移動の様子、学生食堂での風景、スポーツや音楽活動などの練習に全力で取り組んでいる姿をととても頼もしく見させていただいておりました。三社大祭の山車の引き子での参加に私もいっしょに挑戦しました。オープンキャンパスでの学生たちのトークショーや学園祭のステージでの演奏やダンス、学外のショッピングセンターにおける大学紹介ブースでのパフォーマンスなど、大学PRのために率先して動いてくれる学生たちには感謝の言葉しかありません。まちなかで会食をしたときに出逢ったそのお店のアルバイト学生がその数日後成績優秀者へのマイスター授与式で認定証を渡す相手の学生であることに気づいて驚いたことがありましたが、とても楽しい思い出であります。

私は卒業アルバムに皆さんに送る言葉として「世界が大きく変わる 君は君であれ」と書かせていただきました。大学生にとって大学とは端的に学生が大人になるにあたっての人格が完成する場であります。大学生として過ごす中で思い描いた通りの結果を手にしたこともあれば、想像もしていなかった壁にぶつかり苦しんだこともあったと思います。その中で君の君としての存在が、この世の中でたった一人の君でしかない存在が確かに形作られてきました。そのことに自信をもってこれからのあらゆることに立ち向かっていってほしいという思いを込めました。世界とはこれから出会うであろう全ての存在であり環境です。国際情

勢も日本の在り様も地域社会もそして働くということの意味も含めてまさに世界は激動と言っている様相を呈しています。かつて考えられなかったような出来事が起こり、想像もできなかった技術が社会を変えていきます。しかし、何が待ち構えていると、八戸学院大学で学生として過ごす中で成長した自分に自信を持ち、新たな船出をしてほしいと願います。

今、国内の大学は、中央教育審議会の「知の総和」答申の下、急激な少子化への対応に向けた改革が求められています。本学も真に地域に求められる大学であり続けるために行政、経済界、他の教育機関との連携をさらに深めていく形で進化を続けていきたいと考えております。本日ご参会の皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

最後に、卒業生の皆さんに寄り添いながら皆さんを支えてこられた先生方や職員の皆さん、そして、ご支援を賜りました同窓会や地域の皆さんに感謝を申し上げて式辞いたします。

令和8年3月18日

八戸学院大学 学長 小林 眞

八戸学院大学短期大学部 令和7年度 学位記授与式 式辞

地面を真っ白に覆った雪や凍てつくような風も漸く去り、温かい日差しの下に生きるものすべてが再び輝き始める季節となりました。命のたくましさ、美しさが心に沁みるこの季節に、大きく成長した卒業生の旅立ちを祝うことが叶い、感に堪えません。

幼児保育学科52人、介護福祉学科11人の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今日までご子息・ご息女を温かく見守り、応援してこられた保護者の皆様にも心よりお祝い申し上げます。また、日頃より本学の教育活動にご理解とご支援を賜り、本日ともに卒業生の門出をお祝いして下さっているご来賓の方々に厚く御礼申し上げます。

さて、去る2月14日は両学科にとって大変喜ばしい日となりました。幼児保育学科は一大行事である星の子シアターを開催し、午前は法人内の3つの幼稚園の園児とともに建学の精神を表現する音楽劇「ノアの方舟」を、午後は卒業公演であるミニオペレッタを上演しました。2つの舞台の準備・練習を並行して行うのは負担が大きかったと思いますが、オペレッタでは台本、振り付け、衣装まで試行錯誤を重ね、音楽や照明も担当して素晴らしい舞台を創り上げ、地域のたくさんの子どもたちに楽しんでもらいました。

一方、介護福祉学科はこの日、八戸市学生・高校生まちづくりコンペティションに参加し、市長賞を受賞しました。

これは、学生が五人五色の衣装に身を包んだ“けっばレンジャー”に扮し、教育機関や商業施設において、楽しく分かりやすく介護の魅力を伝える活動を行ってきたことが高く評価されたものです。さらに、皆さんは介護福祉士国家試験合格率100%という目標も見事に達成されました。皆さんの学内外での頑張りに敬意を表します。

急速に進行する少子化の中で、全国どの大学も運営に苦心している状況ですが、本学は新年度、両学科ともに昨年より多くの入学生を迎える見込みです。これも皆さんが在学中、保育・介護の魅力と重要性、そして本学の教育活動の成果を地域社会に発信してくてくれたおかげと感謝しております。

今年は東日本大震災から15年を迎えました。卒業生の皆さんの多くは、震災の時、就学前の幼い子どもでした。地震発生時に保育園や幼稚園に居た人も多いことでしょう。あのとき、家族や園の先生たちに守られた皆さんが、これからは子どもや高齢者の命を守っていかなくてはなりません。それはたいへん責任の重い仕事ですが、同時にそこから大きな喜びと学びを得ることの出来る仕事でもあります。

ご存じの方も多いと思いますが、「子どもは3歳までに一生分の親孝行をする」という名言があります。子どもの笑顔や日々成長する姿から親はたくさんの幸せを受け取り、生き方や価値観を変えるような経験をさせてもらっている。そのことを表現した言葉です。一方で、「死は、親から子への最後の教えである」とも言われます。人は誰でも老い、いつかは死を迎えます。命の有限性と人の尊厳を身をもって教えるのは、親としての最後の仕事と言えるでしょう。

保育者、介護福祉士は親でも子でもありませんが、人生の始まり、そして終わりの時期の姿に接し、それを支えることを通じて、他者の人生だけでなく、自分自身をも豊かにすることができるのではないのでしょうか。これまで多くの卒業生と接し、学生時代とは異なる輝きを身にまといているのを見るたびに、そのことを強く感じております。

皆さんの今後の成長と、人生に多くの幸せが訪れることをお祈りし、私の式辞といたします。

令和8年3月18日

八戸学院大学短期大学部 学長 杉山 幸子

各賞受賞者

- 学校法人光星学院 理事長特別賞
地域経営学部地域経営学科 金井 愛未
学校法人光星学院 理事長特別賞
健康医療学部人間健康学科 栗澤 陸
八戸学院大学 学長賞
地域経営学部地域経営学科 藤田 広大
八戸学院大学 学長賞
健康医療学部人間健康学科 北山 萌香
八戸学院大学 学長賞
健康医療学部看護学科 辻井 里奈
八戸学院大学 学長賞
別科助産専攻 佐々木 楓
八戸学院大学 優等賞
地域経営学部地域経営学科 小田嶋 倅、川原 歩士
八戸学院大学 優等賞
健康医療学部人間健康学科 高梨 姫華、大野 沙弥
八戸学院大学 優等賞
健康医療学部看護学科 中村 ふみ、荒谷 倅恵
- 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟表彰
八戸学院大学 健康医療学部人間健康学科
高坂 真登香
- 一般社団法人日本私立看護系大学協会会長賞
八戸学院大学 健康医療学部看護学科
十文字 紗香
- 八戸学院大学短期大学部 学長賞
幼児保育学科 松橋 ひより
八戸学院大学短期大学部 学長賞
介護福祉学科 佐藤 愛衣
八戸学院大学短期大学部 優等賞
幼児保育学科 佐々木 遥香、新沼館 あみ
八戸学院大学短期大学部 優等賞
介護福祉学科 SHANAYA OMARA、高屋敷 楓花
- 一般社団法人全国保育士養成協議会会長賞
八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 小向 彩葉
- 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会会長賞
八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科 大村 潤

令和7年度採用教員紹介

八戸学院大学 地域経営学部 地域経営学科

種市 朋哉 (たねいち ともちか)

1965年生、青森県八戸市出身。東北大学教育学部教育学科教育社会学・社会教育学専攻卒業。上越教育大学大学院学校教育研究科学校教育専攻生徒指導コース修了。

専門分野は教育心理学、学校教育、学校経営、国語科教育。研究テーマは生徒指導、構成的グループエンカウンター、学校管理運営、国語表現。

高校教諭として八戸高校、八戸中央高校、三本木高校、岩手県立盛岡第四高校など普通高校に勤務し、その間、現職教員のまま上越教育大学大学院に内地留学(1996-1998)。修了後も教諭として勤務した後、教頭(木造高校)、青森県教育庁教職員課高等学校人事グループ主任指導主事を経て、校長(八戸北高校)を務めた。

担当科目は教育行政、キャリアデザイン、日本語表現リテラシー、基礎演習、プレゼンテーション。主な業績は「高校生の自己認知と自尊感情の関連 ― 個性記述的視点導入の試み ―」。所属学会は日本教育心理学会、日本心理臨床学会。

八戸学院大学 健康医療学部 看護学科

工藤 瑞穂 (くどう みずほ)

1972年生まれ 八戸市出身 秋田赤十字看護専門学校卒業後、八戸赤十字病院勤務。東京女子医科大学看護学部認定教育センター手術看護分野修了し、手術看護認定看護師取得、2025年より現職。2026年4月青森県立保健大学(博士前期課程)入学。

専門分野：成人看護学、担当科目：成人看護援助論Ⅰ、災害活動論、急性期・周手術期看護実習、慢性期看護実習、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

所属学会：日本看護協会、日本手術看護学会、青森県看護教育研究会、主な業績「超緊急帝王切開術の合同シミュレーションの成果と課題」(日本手術看護学会、八戸赤十字病院紀要)「手術待機中の家族に対する支援の考察」(日本手術看護学会)。

著書：オペナーシング「麻酔看護ビジュアル図表ノート」、「新人ナースのための早わかり実践ノート」

社会活動：日本手術看護学会認定看護師委員会オブザーバー、日本手術看護学会年次大会教育セミナーパネリスト、青森県手術看護情報交換会講師、八戸看護専門学校・千葉学園高等学校看護専攻科非常勤講師。青森県看護協会手術看護分野リソースナース登録(現在に至る)

八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科

杉田 由佳理 (すぎた ゆかり)

1964年生、青森県青森市出身。東京都立松沢看護専門学校卒業、看護師免許取得。青森厚生病院ICU・外科病棟に5年間勤務後、青森市医師会立青森准看護学院で専任教員を努める。その後、青森市社会福祉協議会のホームヘルパーを経て、五所川原市の特別養護老人ホームで介護支援専門員に従事。2012年から青森中央短期大学看護学科高齢者看護学領域、青森中央学院大学看護学部老年看護学領域で看護教育に携わりながら、青森中央学院大学大学院を修了(地域マネジメント修士)。2021年から青森中央短期大学幼児保育学科専攻科福祉専攻で「こころとからだのしくみ領域」と「医療的ケア領域」を担当。2025年4月より現職。主な業績は「高齢者疑似体験演習を通しての高齢者観」「特別養護老人ホームにおける認知症高齢者のBPSDに関するケアの実態と検討」「高齢者の就業・雇用に影響を与える要因と雇用ミスマッチ」「A大学看護学部学生的生活習慣について」など。

所属学会：日本老年社会学会